塚田広人先生のご退職にあたって

塚田広人先生は平成30年３月31日をもって，本学を定年によりご退職されます。先生の34年の長きにわたるご貢献に心より感謝し，本号を退職記念号として発行いたします。

先生は一橋大学経済学部をご卒業の後，一橋大学大学院経済学研究科に進まれました。博士課程を修了された後，日本学術振興会奨励研究員を経て，昭和59年４月に専任講師として山口大学経済学部に迎えられました。その後，昭和61年８月に助教授，平成６年８月に教授に昇任されました。先生は経済政策がご専門で，教育，研究，運営など様々な面において活躍され，経済学部はもとより山口大学の発展に寄与されました。

先生はニューディール期のアメリカ経済の構造変化を通貨政策，財政政策等の観点から分析されました。その後，ご研究を展開される過程で，経済システムの構成要素とその要素間の関連性及び相互作用に着目され，資本主義経済の歴史的意義と歴史を紡ぐ運動メカニズムの解明という大きな課題に挑戦されました。この挑戦によって，先生は国家介入の必要性と効果の経済学的分析に留まることなく，社会における正義，公正，公平といったより壮大な概念を取り込まれ，同時に研究者としての“悩みの種”を手にされました。ご著書『社会システムとしての市場経済』や『Economic Globalization and the Citizens' Welfare State: Sweden, UK, Japan, US』，また翻訳書『社会的正義論の再検討』からは，先生が如何に精力的に“悩みの種”に取り組まれてきたかを窺い知ることができます。

本年２月２日におこなわれた最終講義はご著書と同じ「社会システムとしての市場経済」という題目で，グローバル化の進展を踏まえた現代社会の構造と循環を表す一枚の“絵”が提示されま

した。先生が“家”と表現されるその構造物は多層階をなしており，政治を土台に自然，教育，生産・雇用の順により上階へ進む構造になっています。数十年にわたって先生が信念をもって深化されてきた過程があたかも曼荼羅のように眼前に広がり，先生が“悩みの種”を市民型福祉国家のグランドデザインという“希望の芽”に昇華されたのだと認識しました。

先生は教育においては，学部の「経済政策総論」や大学院経済学研究科経済学専攻の「経済政策原理の研究」等を，また，大学院東アジア研究科の「市民社会と市場経済システム特別講義」を担当されました。先生の語り口は常に穏やかで，学生に対し対等な対話を意識され，また求められました。

先生は大学・学部運営においても多くの委員を務められました。学部内では平成９年に学生委員長として学生の履修指導を充実させる仕組みを取り入れられました。学内では，学生部委員をはじめ，評議員，大学評価室長，大学院東アジア研究科副研究科長の重責を担われました。特に，平成３年の大学設置基準の大綱化により，国立大学は選択の自由度を高めることができる一方で，継続的な自己点検・評価活動と不断の改善とにより，自ら説明責任を果たすことが強く求められました。山口大学としても自己点検評価の仕組みの確立は急務の課題であり，先生は初代大学評価室長として手腕を発揮されました。

先生が学究の道に進まれたのは，多感な時代に戦争と人の命との関係性，そして社会経済の果たす役割の重要性に気付かれたことがきっかけであったとお聞きしました。学生を相手に微笑みを絶やさず，留学生との対話では時に流暢な英語を交えながら，学生の話に根気強く耳を傾けられるご様子には，他者を尊重し長所を引き出す姿勢が貫かれていたと感じました。

この度，定めによりご退職されますが，先生の長年の誠実なご

尽力に心より感謝申し上げます。先生が描かれた市民型福祉国家のグランドデザインの実現には更なる年月が必要と考えます。ぜひ，人類千年の大計に向けて，今後もより一層ご研究を展開されますよう，また，これからも先生との絆が末永く続きますよう切望するとともに，先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

平成30年３月31日

山口大学経済学部長　　成　富　　敬